

# 醍醐寺蔵『探要法花驗記』日本・中国両部の比較

— 和化漢文用字法の共通基盤解明に向けて —

磯 貝 淳 一

## 一、はじめに — 問題の所在 —

醍醐寺蔵『探要法花驗記』（上・下巻）は、久寿二（一一五五）年に慈悲寺の僧源西によって編まれた法華経靈驗譚の集成である。以下に掲げるように、その構成は日本と中国の説話がほぼ交互に排列される形となっており、<sup>〔1〕</sup> 出典は概ね日本の部が『大日本国法華経驗記』、中国の部が『法華経伝記』から採用されたものとされる。<sup>〔2〕</sup>

下巻			上巻			日本の部	中国の部
41	18	1	23	4			
	20	2	25	6			
	22	4	27	8			
	24	6	29	10			
	26	8	31	12			
	31	10	33	14			
	33	12	36	16			
	35	14	38	18			
	39	16	40	20			
	36	21	34	17	1		
	37	23	35	19	2		
	38	25	37	21	3		
	40	27	39	22	5		
	42	28	41	24	7		
	43	29	42	26	9		
		30	43	28	11		
		32		30	13		
		34		32	15		

（表中の数字は各話冒頭に付される説話番号。各説話が、日本・中国どちらに出自を持つかによって分類している。）

本資料は他に写本を見ず、醍醐寺蔵本が唯一の伝本となっている。また古くからその名を知られてはいたものの、国語学国文学の研究対象として用いられるようになったのは、昭和六十年に馬淵和夫氏が影印・訳文を刊行して以降のことである。ただし、国語学に限らず国文学の分野においても本資料を対象とする研究は少なく、未だその資料的価値・位置付けは明確にされていない部分が多い。

稿者はこれまで、本資料を和化漢文研究の対象とし、その用語・用字の性格を探ってきた。特に、中国の出典である法華伝記と直接的な比較が可能であることから、和化漢文と中国漢文との差異を記述するのに適した資料として、その価値を見出してきた。一方で、本資料の本文が出典にはほぼ忠実であると認められることから、記述された言語事象が本資料オリジナルのものであるのか、出典のそれ

と認めるべきものであるのかという点も問題となってきた。この点については、これまで特に中国の部について出典との詳細な比較を行うことよって、『探要法花験記』が独自の改変を行っている様相のいくつかを明らかにすることができた。<sup>3)</sup>

しかしこれまでの研究は、本資料全体が所謂本邦成立の和化漢文として均質なものであるとの前提に立ったものであって、出典が日本と中国とに分かれることが本資料に如何なる影響を及ぼしているかという点については、未だ明確にしてはこなかった。そこで本稿では、『探要法花験記』が一個の均質な和化漢文資料として成立しているのか、更に進んで、日本語文として独自の用語・用字を確立し得ているのか否かという問題について考えてみたい。

まずは本資料日本・中国両部における漢字使用を計量的に把握し、比較を行った上で、用字法の面からの検討も加える。続いて両部と出典との関係性について、用字の改変の問題を指摘する。そこには日本・中国、異なる出典の異なる用字法を共通のものに変える傾向が存していることを明らかにする。

## 二、日本・中国両部の比較

### — 漢字の計量的比較と用字の概観 —

二つ（複数）の文章が共通の基盤に支えられているかという問題について答えを得るためには、用字・用語・構文等様々な観点から

の検討が必要となる。用字法に限っても、個々の漢字と日本語との関わり、単字使用熟字使用の別、類義となる他の漢字との関係性など、使用されるすべての漢字がどのようなシステムで運用されているのかを確認するための手続きが多い。本稿では、先の問題意識に近づく一階梯として、両部の「近さ」を把握するための基礎作業を行うこととする。

まずは『探要法花験記』全体における漢字使用について、計量的な観点から概観を行うと以下のようなようになる。（本文中の「々」字は、直前の漢字に戻して集計している。）

#### 述べ字数 二七、三七五

#### 異なり字数 一、七八三

#### 平均使用度数 一五・四

次に個々の漢字について、使用度数51以上の漢字を掲げる。

法	404	人	354	一	326	不	301	經	301	花	294	也	261	之	254	日	252	時	236	大	228	有	224	誦	222
生	219	即	207	佛	197	以	193	是	193	天	176	此	173	者	173	我	171	師	163	來	158	其	154	見	150
三	147	如	144	聞	140	中	132	十	131	日	127	而	127	年	126	爲	124	僧	122	後	122	心	121	所	118
身	118	无	113	至	113	山	112	云	111	王	111	行	110	於	108	聖	106	道	101	等	94	入	90	出	88
得	87	又	83	上	82	五	82	若	82	四	80	寺	80	明	80	矣	80	言	80	願	80	門	79	二	78
世	77	持	75	汝	75	七	73	深	73	然	73	自	73	今	72	夢	72	淨	72	可	70	妙	70	比	70
夜	69	已	69	乘	68	國	68	故	68	間	67	衆	66	諸	66	讀	66	住	65	子	65	下	64	方	64

丘 63 受 62 在 62 女 62 作 61 八 60 餘 60 知 59 事 57 從 57 本 57 苦 56 還 56  
供 55 依 55 告 55 觀 55 語 55 成 54 悲 54 沙 54 說 54 住 53 念 53 何 52 樂 52  
菩 52 部 52 香 52 六 51 力 51 千 51 皆 51 雖 51

使用度数上位の漢字群中でも以下の a、e の類については、本資料の文体・文章内容に関わる漢字使用の特徴が現れていると考えられる。

a 「法」「經」「花」「佛」「天」「僧」等の名詞類

① 夫妙法蓮花經者常住不老之方種智還年之藥也 (上1オ2)

② 其罪銷盡當生十方佛前 (上20ウ3)

③ 時細樂聞天奇香滿鼻也 (上30ウ10)

④ 誦法花經有一老僧同籠彼寺僧夢堂庭及四邊貴人充滿 (上16オ5)

これらの漢字は、主に名詞或いは名詞の造語成分として使用される。これらの漢字が繰り返し使用されていることは、当該資料が法華經に関する靈驗譚の集成であることと深く関わるものであろう。

b 「不」「也」「之」「即」「者」「如」「而」「於」等の助字類

⑤ 答曰不可思議其福无量也 (上31オ4)

⑥ 增賀聖人者參議橋恒平卿之子息也 (下30ウ8)

⑦ 即讀一卷畢置經案上其經踊空卷而置机 (下8ウ5)

⑧ 滿百部時夢福成寺上空有異光漸近於庭中有二人天百千天衆圍繞之 (下14ウ2)

漢文を構文的に支える助字の類である。とりわけ「不」が多用されるのは靈驗記の特徴とされる。また「也」については出典にはない当該字を和化漢文が添加する傾向があり、和化漢文としての『要法花驗記』を特徴付ける用字と言えよう。

c 「一」「三」「十」「五」「四」「二」「七」「八」「六」「千」の数詞類

⑨ 時源尊捧經卷從第一卷至第八卷高聲讀誦 (上23ウ5)

⑩ 有一比丘修行諸國迷山路失方角 (下14ウ7)

d 「是」「此」「其」等の指示代名詞・「我」「汝」等の代名詞の類

⑪ 更有大城相去四五里次第有三十二大城是則地獄也 (上20ウ5)

⑫ 寺西十餘里有小山其山本有一石室其室內藏之 (上22オ2)

⑬ 我在生間殺生放逸无惡不造也 (上16ウ3)

⑭ 即見吾來呵責曰汝依宿業生旃陀羅家 (下20ウ4)

e 「曰」「有」「誦」等、主に動詞として使用される類

⑮ 父母不信而曰何以知之 (下22オ3)

⑯ 唐襄州有一優婆塞家甚富貴妻兼兩女也 (下22ウ3)

⑰ 深發道心偏誦一乘遂發願書寫法花一部以為持經 (下23オ5)

「曰」「誦」等は語りの引用や経文等の読誦を表す語として、「有」は靈驗譚の語り起こしの型となる人物の紹介の文脈において多く使用される。

以上、使用頻度上位の漢字の検討からは、「漢文で書記された靈驗記」の漢字使用の特徴が確認できた。次に、これらを日本・中国

両部に区分した場合についての比較を行う。漢字使用を日本・中国両部に分かって計上したのが以下の数値である。(本文のみを比較対照するため、序文・目録部分についてはこれを除いてある。)

〔日本の部〕

述ベ字数 一三、五二九

異なり字数 一、三六六

平均使用度数 九・九

〔中国の部〕

述ベ字数 一三、三〇二

異なり字数 一、四二〇

平均使用度数 九・四

中国の部において、異なり字数が54字多くなっている。述ベ字数から明らかに文章量が両部ほぼ等しいことを考えると、字種が多くなるのが中国の部の特徴と考えられるようである。但し、差を生じさせる字種の多くは使用度数が極めて少ないものである。以下、使用度数20以上の漢字について、具体的に両部の比較を行う。

〔日本の部〕

法212 人196 一177 不155 經155 花128 之126 也122 有117 日112 生109 時104 大100  
 誦99 即98 此97 我96 以89 是86 佛86 見84 聖84 僧82 其80 來79 天76  
 心72 後68 日66 年66 聞62 者61 山60 入60 所58 師57 爲57 身55 无53

道52 行51 如51 深50 讀50 三49 十48 出48 中47 作46 乘46 夢45  
 間44 子44 持44 願43 比43 又43 女42 念42 妙42 往41 可41 今41 而40  
 於39 事39 明39 夜39 世38 門38 雖38 丘37 若37 下36 修36 當36 依35  
 言35 五35 四35 然35 部35 聲35 還34 向34 告34 寺34 住34 二34 自33  
 諸33 淨33 語32 上32 等32 得32 從32 力31 卷30 樂30 隨30 去29 極29  
 善29 數29 矣29 更28 了28 已28 手27 宿27 神27 知27 命27 處27 衣26  
 云26 喜26 苦26 方26 六26 國26 觀26 餘26 或25 相25 内25 非25 滅25  
 王24 何24 及24 沙24 成24 西24 多24 只24 彼24 發24 禮24 音23 皆23  
 汝23 菩23 本23 老23 彌23 死22 食22 都22 悲22 病22 梨22 家21 空21  
 種21 衆21 尊21 朝21 母21 兩21 焉21 闍21 近20 七20 受20 常20 他20  
 堂20 童20 奉20 養20 令20 覺20

〔中国の部〕

法179 花160 人149 經142 不140 日139 也137 一136 時126 大123 誦122 之113 者110  
 即109 佛109 有107 生106 是105 以100 天100 師94 三90 如90 而87 王85 中85  
 聞77 來77 我74 此74 其73 十68 於66 見65 至65 爲64 身63 等61 无59  
 所58 年56 行55 得54 日54 後52 汝51 矣51 山50 故48 心48 七47 上46  
 道46 言45 寺45 衆45 說45 在44 若44 五42 受42 明41 已41 云40 香40  
 又40 國40 自39 出39 淨39 二38 然37 僧37 方37 願36 供36 四36 世35  
 門35 本34 八33 餘33 諸32 知32 業31 千31 苦30 今30 住30 入30 夜30  
 養30 火29 皆29 持29 成29 悲29 何28 可28 家28 母28 觀28 講27 地27

夢 27 釋 27 下 26 菩 26 滿 26 意 25 謂 25 終 25 前 25 答 25 白 25 欲 25 從 25  
 禪 25 光 24 沙 24 薩 24 死 24 食 24 百 24 品 24 父 24 妙 24 問 24 惠 24 問 23  
 空 23 語 23 昔 23 比 23 六 23 丘 22 及 22 九 22 吾 22 州 22 少 22 常 22 羅 22  
 蓮 22 偈 22 樂 22 緣 21 還 21 告 21 土 21 廿 21 名 21 乘 21 寶 21 燒 21 德 21  
 安 20 依 20 更 20 子 20 初 20 深 20 聖 20 多 20 必 20 利 20 彌 20

個々の漢字について詳細に比較を行う必要があるものの、先に取り上げた a、e の観点において比較を行う限り、両部の漢字使用に大きな違いは認められないことが分かる。以上、計量的な把握を行った限りでは、『探要法花験記』日本・中国両部の漢字使用は共通の基盤を有していると考えて矛盾しない結果となっている。

### 三、動詞の用字からみた『探要法花験記』

#### 日本・中国両部の共通性

ここでは個々の漢字の使用度数を単純に比較するだけではなく、それらが具体的にどのようなように使用されているのかという観点からの比較を行う。先の比較では、個々の漢字使用において漢字は共通であって、それがどのような日本語書記との関わりにおいて用いられたものであるかは確認できなかった。

そこで、本資料において動詞の表記に供されたと認められる漢字をすべて対象とし、以下の諸点を基準として語の確定を行った。さ

らに検討対象とする語を選定した。

- ① 単純語・複合語の別
- ② 訓読語・音読語の別

- ③ 数種の和訓が想定される際の、読みの根拠

①については、今回はすべて一漢字一語の対応関係によって抽出を行うこととした。第一段階として漢字と訓との結びつきを確認するに留まる処置である。截捨(きりすつ)・還入(かへりいる)・持来(もてく)等複合語と認めるべき例は多く認められるため、今後これらを認めて修正を加えていくこととする。②および③については、本資料や同時代訓点資料の加用例、色葉字類抄・類聚名義抄の記載を参考にし、訓の確定を行った。また対象とする動詞は和訓のみとし、漢語サ変動詞についてはこれを除外した。

以下この作業に基づき、本資料の動詞の用字を概観する。先ず日本・中国両部全体において、動詞の異なり語数は383語となる。その表記に供される漢字の字種の延べ表記数は528字である。従って、一語の漢字表記に使用される漢字の字種の使用度数は1.38字/語となる。以下に日本・中国両部それぞれについて同様の調査を行った結果を示す。

#### 〔日本の部〕

○異なり語数 294語 ○延べ表記数 375字 ○使用度数 1.28字/語

〔中国の部〕

○異なり語数 268語 ○延べ表記数 352字 ○使用度数 1.31字／語

僅かに中国の部における使用度数が上回ることが分かる。この数値の差異が有意のものであるか否かを知るためには、前節での検討と同様、複数の文献について調査を行った結果と比較する必要があり、現時点では明確な位置づけをなし得ない。しかし、両者の使用度数は極端に離れてはいないことが確認されよう。

一語に対応する漢字の種類という観点から全体を計量的に把握する限りでは、日本・中国両部に明確な差異は認められなかった。しかし、この観点は全体を概略的に把握することができるだけであって、個々の実態はみえてはこない。そこでさらに、語と漢字との対応関係を具体的に確認する。本資料における動詞とその表記に供された漢字の種類を日本・中国両部との対応関係に基づいて、一部を例示しつつまとめると以下ようになる。(日―日本の部・中―中国の部)

I 日本の部と中国の部が共に一種または同じ数の複数表記を使用

1 同じ表記を使用…14語

〔およぶ〕

〔及〕29例(日16 中13)

①各居東西或念誦或讀經然間夜及深更異風颯々(下16ウ10日)

②一日一夜不動如入禪定衆皆異之即及曉更開眼悲涕(上20オ8中)

〔あり〕

〔有〕197例(日101 中96)

③通利法花更无忘失亦有道心常念後世(上24オ8日)

④天竺有一比丘名曰无行恒修法供養也(上11ウ10中)

〔在〕47例(日10 中37)

⑤雖須剃頭染衣晦跡深谷妻子在側忽難捨(下21ウ1日)

⑥迦毘羅城一百童子昔同在一邑作伎樂持香花供養佛塔(上5ウ5中)

2 異なる表記を使用…15語

〔ぎゆ〕

〔銷〕2例(中2)

⑦即告僧定曰我是毘婆尸如來也以汝罪銷故來爲證明(上12ウ7中)

〔消〕1例(日1)

⑧即着我衣今依着此法花衣妄想之嵐息惡業之霜消身體煖々心神

澌々也(下3ウ1日)

II 日本の部がより多くの表記を使用…12語

〔ふ〕

〔經〕16例(日6 中10)

⑨時當暑月雖經數日身不爛壞如存生時焉(上29オ7日)

⑩雲集星烈矣後受病而死去經三日蘇息曰吾見炎魔王（上15ウ3中）

「逕」 10例（日10）

⑪送是閻魔王消息也夢覺見父母逕一日夜即得蘇息（上18ウ7日）

「歷」 2例（日2）

⑫比丘夢驚入比良山歷數日尋求閻遙聞讀誦大乘聲（上19オ11日）

「伐」

「切」 7例（日7）

⑬己心生怖畏悲泣歎息曰我已切佛師肩既殺害了（下18オ4日）

「伐」 1例（中1）

⑭紹兼告同行曰我燒身處必生梧桐敢不可伐之（下8オ9中）

「截」 1例（日1）

⑮其木蠹槁既成枯木過數月爲截捨（上14ウ8日）

### III 中国の部がより多くの表記を使用…13語

「くくぬ」

「造」 16例（日10 中6）

⑯況造三卷往生要集流布天下以來念西方遂素意者和漢相兼往々而

在（上13オ8日）

「作」 2例（日1 中1）

⑰若營田種手作自食不與他人（上21オ5中）

「製」 2例（中2）

⑱諸佛即來語法師是製寶塔品疏時也（上9ウ6中）

「したがふ」

「隨」 12例（日7 中5）

⑲時水瓶踊下漸々進去比丘隨瓶行（下10オ2日）

「從」 7例（中7）

⑳即生年十八啓母出家從師受業（下10オ8中）

### IV 日本の部、中国の部どちらか一方にのみ表記が存する…202語

IVについては比較に供し得ないため検討からは除外する。語と表記の対応関係ではI-Iが中心的となっており、日本・中国両部は動詞の用字法において共通する部分が多いことが分かる。また、この類には一語一表記の対応が多くを占める。

I 2からIIIについては両者が異なった用字を行っている様相が看取される。しかし、用例の大部分は一例もしくはそれに準ずる少数を数えるに留まるものであって、比較に供するには難のあるものである。

日本・中国両部における動詞の用字は、字種の使用度数からは近似した様相が伺えること、両部の使用に違いが認められる部分も存するものの、それを明確な差異として示し難いことが分かる。

以上の検討からは、両部の間に大きな差異を認めることはできない

かった<sup>1)</sup>。概観に終始したため、尚詳細な検討を加える必要があるものの、『探要法花験記』の日本・中国両部の性格がほぼ均質的であると指摘することはできるであろう。しかし、両者が類似していることと、用語・用字が同一の基盤に基づいているということは又別の問題である。本資料が一個の和化漢文資料として成立していることを証明するためには、単なる類似性を超えて積極的に用語・用字の統一を図ろうとする方向性があることを指摘する必要があると考える。

#### 四、『探要法花験記』の用字基盤確立の方法について —「いはく」表記に見る出典からの改変—

本資料において「いはく」のク語法「いはく」の表記に供される漢字は「云・曰・言・謂」の四種である。日本・中国両部ではそれぞれ四種の漢字を使用し、中心的に使用する（使用頻度が最も高い）のは共に「曰」字である。このことは両部の用字の共通性を感じさせるものであるものの、文章内容を同じくする二資料の用字が類似するのは自然なことと言えよう。資料全体に渉る他の語と表記の関係も同様である。ここでは出典資料との関わりを考えることで、両部の用字には、異なる出典に基づきつつも共通の用字基盤を整えようとする実態が存することを指摘する。

『法華経伝記』と『探要法花験記』中国の部、及び『大日本国法華経験記』と『探要法花験記』日本の部両者の対応説話について、

当該語の用字の比較を行う。このことを通して、『探要法花験記』が背景とする言語（中国語・日本語）が異なる二種の出典をどのような形で取り込んで文章を成立させているかという点について、一つの方向性を示したい。

#### 1 『法華経伝記』と中国の部

比較の対象となる説話は四十二話<sup>12)</sup>である。ここにおいて「いはく」の表記を調査すると、出典である『法華経伝記』と『探要法花験記』とが必ずしも同じ用字を行ってはいない様相が明らかとなる。

A 『法華経伝記』と『探要法花験記』とが同じもの 32例

「曰（19例）・言（8）・云（5）」

法①經三日蘇起曰吾見炎魔天子問道人有何功德

（『法華経伝記』・巻第3ノ3）

探①經三日蘇息曰吾見炎魔王問道人有何功德

（『探要法花験記』・上15ウ3）

B 『法華経伝記』と『探要法花験記』とが異なるもの 38例

a 『探要法花験記』において「云」になっているもの 3例

「×」→「云」 3例

法②……若依續僧傳曇榮與僧定同行方等悔法（巻第5ノ7）

探②<sup>13)</sup>若依續僧傳者曇榮與僧定同行方等悔法（上12ウ12）

b 『探要法花験記』において「曰」になっているもの 27例

〔云↓曰〕 11例

法③乃彈指云不可思議也（卷第3ノ4）

探③乃彈指曰不可思議也（上卷19才4）

〔言↓曰〕 6例

法④長跪言善哉善哉汝昇座將講說其義（卷第3ノ3）

探④長跪曰善哉々々汝昇高座將講說其義（上15ウ7）

〔×↓曰〕 10例

法⑤化人現前安慰其人…誦及千部千佛共守護（卷第4ノ30）

探⑤化人現前安慰其人曰誦及千部者千佛共守護（上24ウ7）

c 『探要法花驗記』において「言」になっているもの 7例

〔云↓言〕 2例

法⑥最後一佛云我是汝本師釋迦牟尼也（第5ノ7）

探⑥其最後一佛言我是汝本師釋迦牟尼也（上12ウ9）

〔曰↓言〕 4例

法⑦諸天讚曰汝在閻浮誦法華功德自至此天處（卷第6ノ9）

探⑦諸天讚言汝在閻浮提誦法花功德故既至此天處（下5才6）

〔×↓言〕 1例

法⑧臺佛即語衍汝還閻浮以我云相示衆生（卷第5ノ10）

探⑧彌陀佛即告衍言汝還閻浮以我云相語衆生（上14才9）

d 『探要法花驗記』において「謂」になっているもの 1例

〔×↓謂〕 1例

法⑨以法華文字爲文綵…欲飛翔身自輕即飛去西方（卷第5ノ10）

探⑨以法花文字爲羽文時謂我身輕利也飛而詣極樂即向西方（上14才4）

同文的箇所における「いはく」の表記全70例のうち『法華経伝記』

と同じ用字を行うものは32例である。その内訳を見ると、曰（19例）・言（8例）・云（5例）となっており、「曰」の使用が優勢であることが分かる。残り38例は異なった用字を行うものである。その内訳は『探要法花驗記』において「曰」が使用される例が多く27例、次いで「言」が7例、「云」3例、「謂」1例となっている。傾向として「曰」を使用する例が目立つ。また②⑤⑧⑨の例に見られるように元々『法華経伝記』には無かった「いはく」を『探要法花驗記』において付け加える例が存する。ここに使用されるのは大部分が「曰」であって、この用字が積極的に用いられる傾向があることがわかる。

## 2 『大日本国法華経験記』と日本の部

対象となる説話は三十二話である。先の比較とほぼ同じ傾向が日本の部においても看取される。

A 『大日本国法華経験記』と『探要法花驗記』とが同じもの

16例

〔曰（11例）・言（4）・云（1）〕

大①流淚高聲起臥辛苦而白言持經上人慈悲免我（第81話6行）

探①高聲叫喚起臥辛苦即白言持經聖人慈悲免我(上2オ5)

B 『大日本国法華經驗記』と『探要法花驗記』とが異なるもの

85例

a 『探要法花驗記』において「曰」になっているもの 81例

〔言↓曰〕 44例

大②尋家來至教父母言於所生子加敬守養是非凡夫(第4話2行)

探②尋家來至教父母曰於所生子當守敬養是非凡人(上10オ1)

〔云↓曰〕 16例

大③有一菩薩告沙門云持一乘經願離生死莫生疑念(第64話3行)

探③有一菩薩告沙門曰持一乘經願離生死莫生疑念(上24オ10)

〔×↓曰〕 21例

大④比丘見僧隨喜無極…善哉沙門希有來此(第73話15行)

探④僧見比丘隨喜曰善哉沙門希有來此(下15ウ7)

b 出典の文章に『探要法花驗記』の当該箇所が存しないもの

3例

以上、出典との比較から日本・中国両部が「いはく」表記に関して、出典の「曰」は受けつぎつつも、他の表記については「曰」へと改変する方向性を有していることが分かる。前節では両部の用字に何らかの共通性があるとの指摘を行ったものの、出典を離れた当該資料独自のものを明らかにするには到らなかった。しかし、

ここで日本・中国両部がそれぞれ「曰」を中心とした改変を行っている実態が明らかになったことにより、本資料成立に際して「出典を参照しつつも独自の用字意識によって用字を統一しようとする志向性」が存する可能性を見出し得たと考える。

## 五、むすびと今後の課題

日本・中国二者の出典を承けて成立した『探要法花驗記』中に、これら異なる出典の影響が認められるのか、又元々の両者の違いを超えて新たな用語・用字の基盤を作り出しているのかという問題について考察を行った。その結果、本資料の日本・中国両部の漢字使用は、計量的な概観・動詞の用字からは大きな差異は認められず、類似性を有するものであることが分かった。更に、両部の用字基盤が共通のものであるか否かという点については、「いはく」の用字に着目し、出典の表記から「曰」に改変する傾向が見られること、元々存しない当該字を添加する場合のあることを指摘した。このことから、『探要法花驗記』成立に際しては日本・中国両出典の用字を本資料独自のものに統一しようとする態度・志向性が存在する可能性を指摘した。<sup>14)</sup>『探要法花驗記』は、異なる二種の文章を併せた、つまり複層的な言語基盤を有する資料ではなく、日本語表記のための用字法に支えられた均質的な和化漢文であると認められると考える。

今回は、「いはく」一語の表記の検討から見通しを立てた。今後

同様の検討を重ねることによって、蓋然性を高めていきたい。<sup>15)</sup> 同時に、表記・語彙・文法等の言語事象としては中国古典文の範疇にありながらも独自性を生み出す志向性が、当該資料の編者の個性によるものであるのか、はたまた和化漢文全体における日本語書のシステムの中に位置付けうるものであるのかという点についても、周辺資料との比較を通じて考えていきたい。

## 注

- (1) 本稿では、日本撰述の資料を出典に持つ説話群を「日本の部」、中国撰述の資料を出典に持つ説話群を「中国の部」と仮称する。
- (2) 馬淵和夫編『醍醐寺蔵探要法花験記』(昭和六十年、武蔵野書院) 解説による。尚、醍醐寺本は嘉禎三(四)(一三三七～一三三八)年にかけて書写加點されたものである。
- (3) 拙稿 a 「醍醐寺蔵探要法花験記における動詞の使用について―出典からの改変の問題をめぐって―」『鎌倉時代語研究』第二三輯、平成十二年、武蔵野書院)、b 「醍醐寺蔵『探要法花験記』における「也」の用字意識―出典との比較に見る漢文和化の問題―」『古典語研究の焦点』平成二十二年、武蔵野書院) 等
- (4) 藤井俊博「漢字頻度表」『大日本国法華経験記校本・索引と研究』平成十六年、和泉書院、同「今昔物語集の否定表現―本朝法華験記への増補をめぐって―」『同志社国文学』第四二号、平成七年十一月) 等において、否定表現が大日本国法華経験記の特色となっているとの指摘がある。霊験記のジャンルに属する本資料の用字にも同様の特徴が見られると考える。
- (5) 注3 磯貝論文 b。

(6) 但し、これは使用度数のみによって導かれる結果である。使用度数に違いがなくとも用法上の差異が内在している可能性はある。

(7) より詳細な手続きについては以下の論文で示された方法を参考とした。小林芳規「古事音訓表(上・下)」(『文学』昭和五十四年八月十一月号) 峰岸明「記録語文における漢字表記語の解説方法について―『自筆本御堂関白記を例として』―」(『平安時代古記録の国語学的研究』第二章第一節、昭和六十一年、東京大学出版会)

(8) 現段階では和訓の動詞表記か漢語サ変動詞の表記かの判定について、いずれか決し難い例が数多く存する。今後更に検討を重ね、精度を高める必要がある。

(9) 「延べ表記数」とはこの場合、同一漢字が複数語の表記に供される場合、重なりを考慮せず、すべての組み合わせをカウントした数を示す。

(10) 参考までに高山寺本古往来(高山寺典籍文書総合調査団編『高山寺本古往来表白集』高山寺資料叢書第二冊、昭和四十七年、東京大学出版会)及び石山寺蔵佛説太子須陀摩經(小林芳規・松本光隆・鈴木恵「石山寺蔵佛説太子須陀摩經平安中期點」『訓點語と訓點資料』第七十一・七十二輯合併號、昭和五十九年五月)について同様の調査を行った。

〔高山寺本古往来〕

○ 異なり語数 227語 ○ 延べ字数 274字 ○ 使用度数 1.21字/語

〔石山寺蔵佛説太子須陀摩經〕

○ 異なり語数 267語 ○ 延べ字数 383字 ○ 使用度数 1.43字/語

より詳細な調査が必要な所ではあるが、記録体的な性格を有するとされる高山寺本古往来に対して正格漢文の佛説太子須陀摩經の使用度数が高くなっていることが分かる。このことから正格漢文が一語の表記に複数種の漢字を使用する度合いが高く、対して記録体資料がこれが低くなることが予想される。今回調査をおこなった探要法花験記は丁度これら

の中間の様相を示しており、この類の和化漢文資料の用字の実態の位置づけを考える参考となる。また日本・中国両部の比較からは、日本の部がより記録体に近く、中国の部がより正格漢文に近い様相を呈していることと見ることもできよう。今後更に調査を深めたい。

(11) ただし「ふ」(經・逕・歴)に見られるような差異が、意味・用法の差異を反映したものである可能性はなお残っている。これらは今後個別に検討を加えることとし、ここでは「同じ用字を行う語が多い」「異なった用字の場合も、その異なりは弧例である場合が多い」ことを指摘したい。

(12) 文章の比較から、出典との直接的な関係が確認されるもの。注2文献解説による。

(13) すべてが「日」へと改変する方向性に合うわけではなく、むしろ「日」を別字に変える例も存する。これらが当該字の意味・用法と対応を見せる可能性もあるが、積極的にはこれを見出し得ない。今回は全体の用例数、改変する際の用例数、出典に存在しない「いはく」を添加する際の用例数から判断した。

(14) 但し、「了」などのように日本・中国両部において使用頻度そのものに偏りが存する漢字もある(日本の部28例、中国の部6例)。これがいかなる差異を反映するものなのか、同用法を持つ他の漢字(畢、訖<sup>92</sup>)との比較、また当該用法そのものの有無といった観点から、本資料をより広い射程において捉える必要がある。このことを通じて、本資料が示す和化漢文用法のシステムや本資料成立時に働いた書記の志向性を明らかにすることが可能になると考える。

(15) 今回の検討では、「日」字が中心的な使用を見せた。ただし、「会話文引用の文型は(中略)変体漢文では「云、…者(イハク…テヘリ)」が一般的であるが」(峰岸明『変体漢文』昭和六十一年、東京大学出版会)とされるように、公家の日記たる古記録類では、「いはく」表記の中心となる

のは「云」字である。また当該ジャンルの文章における「云・曰・言・謂」各字は、数量的な差と同時に意味・用法上の差異も有しているようである。「用字法の共通基盤」を、一資料の内部構造の問題に止めず、和化漢文資料全体から見ようとすれば、検討する資料・ジャンルを更に広げる必要がある。またこの問題そのものが、複層的な様相を見せる和化漢文全体について、言語事象に基づく文体範疇を考える上での一つの指標を提示する可能性がある。この点については、稿を改めて述べることとした。

#### 使用テキスト

探要法花験記(馬淵和夫編『醍醐寺威探要法花験記』法華経伝記(大正新脩『大藏経』第51冊史伝部3) 大日本国法華経験記(藤井俊博『大日本国法華経験記校本・索引と研究』)

法華経伝記に関しては、東大寺図書館蔵法華経伝記(大治五年写)との校合を私に行った。原本調査に当たって、東大寺図書館御当局には、格別の御高配を賜った。記して御礼申し上げる。また藤井氏の大日本国法華経験記校本には異本との校合が詳細に行われており、今回検討対象とした漢字に関しても、校異が存するようである。併せて今後の課題とした。

#### 〔付記〕

本稿は国語学会中国四国支部第四十九回大会(平成十五年十月十八日、於島根大学)における口頭発表「醍醐寺威探要法花験記日本・中国両部における用字の比較―用字の共通性と漢文和化の問題―」に基づいて成稿した。また、本研究は第三十九回(平成二十二年)度、三菱財団人文科学研究助成、およびJSPS科研費23520671の助成を受けたものである。

— いそがい・じゅんいち、福山大学准教授 —